

2002年度「博物館学国際協力セミナー」における館外研修について

大塚和義

国立民族学博物館が JICA から受託する博物館学国際協力セミナーは、3週間の日程で毎年行われている。最初の2週間は本館での講義・実習などであり、残りの1週間は館外研修に当てられている。

本年度は2002年10月7日(月)から18日(金)までの館内研修を終えた後、翌週21日(月)より25日(金)まで行われた。

この館外研修は、理論的な講義を主とする館内での講義内容をふまえ、各種の博物館施設において理論を、実際の現場において体験的に理解してもらうことを目的としている。

訪問する博物館施設の選択は、研修員の専門分野や希望等を考慮して行った。研修員の学習希望は、主として博物館マネジメント、考古学、美術、保存科学等の分野であり、また施設としては遺跡の整備・保存と教育的活用の現場を見学したいという要望があった。これまでの館外研修が本州の中国地方に限定されていたが、初めて九州の吉野ヶ里遺跡公園の訪問がプログラムに組み込まれた。以下、およそのスケジュールを記す。

10月21日(月)早朝、大阪を出発して、佐賀県吉野ヶ里(よしのがり)遺跡公園を訪問。ここは、2000年前の稲作文化時代における巨大な権力機構の存在が想定されている大規模な遺跡で、現在史跡公園としての第1期整備が完了している。遺跡発掘事務所の七田忠昭(しちだ ただあき)氏の案内で現在発掘中の現場や、発掘終了地点に復元された建造物や建物内部のディスプレイを見学した。その後、七田氏より「吉野ヶ里遺跡と史跡整備について」の講義を受ける。

22日(火)福岡市博物館の副館長 田坂大蔵(たさか だいぞう)氏より「博物館の展示と資料管理」についての講義を受ける。その後常設展示場ならびに収蔵庫や資料のデータベース作成などの現場を見学する。

23日(水)広島原爆ドームをはじめ、爆心地のモニュメント等を見学の後、原爆資料館(Hiroshima Peace Memorial Museum)の副館長 高野和彦(たかの かずひこ)氏、同・山本靖彦(やまもと やすひこ)氏により「歴史の事実を伝える博物館の役割」について講義を受ける。その後資料館の展示を見学。

24日(木)徳島市の郊外に設けられた“文化の森”施設群のうち徳島県立博物館と県立近代美術館を訪問した。見学の前に博物館の館長 両角芳郎(もろずみ よしろう)氏より「県立博物館と“文化の森”(Bunka-no-Mori Park)の建設と評価」について講義を受けた。その後、資料情報の作成と市民への提供の方法について作業中の現場を見ながら説明してもらった。美術館では吉原美恵子(よしはら みえこ)氏から美術作品の収集・展示・管理等についての講義を受けた。

25日(金)鳴門市の徳島県立鳥居記念博物館を顕彰会の西田素康(にしだ もとやす)氏の案内で見学する。ここは日本の人類学の先駆者である鳥居龍蔵(とりい りゅうぞう)博士が東アジア世界の野外調査で収集した資料や書籍等を収蔵展示している。個人の業績を展示する博物館の代表的存在である。

以上が館外研修の概要である。また研修員たちが強く関心を示し、議論の対象となった点を以下に述べておく。

広大な遺跡公園の吉野ヶ里遺跡では、遺跡の整備および管理の細部や予算関連の事項についての質問が数多く出された。また福岡市立博物館と徳島県立博物館では、博物館経営や入館者に対する情報提供などのサービスについての質疑がなされた。さらに広島原爆資料館では、改めて原爆の投下が何をもたらしたのか、その歴史的な事実をいかに風化させずに次の世代へいかに語り継いでいくべきかについて真剣な討論がなされた。また、徳島県近代美術館では美術作品をめぐる諸課題のなかでも特に退色しやすい絵画作品における照明技術や作品解説のあり方について、担当学芸員へ質問が相次いだ。そして鳥居記念博物館においては、現地の生活風俗などの記録手段として本格的に写真技術を用いた日本における最初の人類学者鳥居というひとりの人物表象の問題、また一個人をテーマにした博物館活動はいかにあるべきかという問題等を、研修員たちはそれぞれ自国のケースと重ね合わせながら思考をめぐらせているというを強く受けた。いうまでもなく、研修で得た知識を自国でいかに活用できるかという点について、研修員たちが常に関心の中心に置いて研修に参加する姿勢が印象深かった。

博物館施設それのみだけでなく、交通アクセスなども含め、その設置された「場」の環境を含めた全体が大きな意味を持つという点の理解を見学の際に留意したが、その点は達成されたという印象を持つことができた。次年度においては館内の講義と館外研修をより一体化したものにしていけることが必要であると考えている。